

【暗証聖句】

「柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。」マタイによる福音書 5 章 5 節

【日・裂かれたパンと注がれたぶどう酒】

聖霊の実の一つである柔和は、「人に傷つけられても怒らず辛抱して耐えること」と一般に定義されています。柔和は現代社会では重んじられにくい特性かもしれませんが、聖書は、それはキリストのご品性であり、またキリストに従う者たちの最も大切な品性の一つであると教えています。柔和という言葉は謙遜と訳されることもありますが、聖書に登場する霊的指導者の多くは柔和であり、謙遜でした。たとえば、モーセは約束の地に民を導く過程で、その民からの悪口や批判に何度も耐えなければなりません。民数記 12 章 3 節に、「モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった」と書かれています。荒野の経験がモーセをいっそう謙遜なものにしていったのかもしれませんが、またヨセフもエジプトにおいて奴隷や囚人の身分となりましたが、その中で柔和さと謙遜さを身に着けていきました。主はすべてをご存じであり、すべてを最善へと導いてくださることを信じて、酷いことをされても、逆らうことなく従ったのでした。預言者エゼキエルも、神様が許された過酷な運命に耐えなければなりません。

エゼキエル 24 章 16～18 節「人の子よ、わたしはあなたの目の喜びを、一撃をもってあなたから取り去る。あなたは嘆いてはならない。泣いてはならない。涙を流してはならない。声をあげずに悲しめ…朝、わたしは人々に語っていた。その夕、わたしの妻は死んだ。翌朝、わたしは命じられたとおりに行った。」

エゼキエルの妻が突然亡くなります。エゼキエルは主に告げられた通り、妻の死の悲しみに耐え、ユダヤ人社会では当たり前だった、大きな声で嘆いたり、泣いたりせず、一人静かに妻の死を悲しんだのでした。これはユダヤ人たちにとって異常とも思える態度でした。そのためユダヤ人たちは、なぜ「妻を亡くしたのに、そのように冷静なのか。何か意味があるのか」と尋ねてきたのでした。エゼキエルは主に告げられた通り、まもなくバビロンによってエルサレムを滅ぼされる。しかし、エゼキエルが妻の死を嘆き悲しむことを許されなかったように、ユダヤ人たちもこれを嘆き悲しんではならないと語りました。彼らはエルサレムの滅亡を悲しむのではなく、それを招いた自らの罪を嘆き悲しまなければならないのでした。そしてそれにより、主こそ神であることを知るのでした。エゼキエルは言葉だけでなく、注目を浴びるような特異な行動を示しながら神様の言葉を伝えていった預言者ですが、ユダヤ人たちに自分たちの罪の結果エルサレムが滅んでいったのだから、それを嘆き悲しんではならないことを教えるために、妻を死に渡され、その死を嘆き悲しまないことによって示さなければならなかったというのは、どれほど辛いことだったのでしょうか。この理不尽とも思える出来後は、神様への深い信頼がなければ、なかなか受け入れられるものではないと思います。ただ、エゼキエルのケースは特別かもしれませんが、私たちが大切な人を亡くすことで、同じ悲しみにある人を励ましたり、そのことを通してイエス様に導いたりすることがあるのではないのでしょうか。そして、大切な人の命が、他の人を救うことになったとき、私たちはこの辛い悲しみを主が許されたことに、ようやく納得できるようになるのです。

【月・恵みのためのとりなし】

モーセは民をシナイ山のふもとに残し、四十日四十夜神様の前に立ち、戒めや幕屋の建設、もろもろの儀式についての教えを受けていました。ところが、それを待っている民に不安がつのつていきます。モーセが山で遭難し、死んでしまったのではないかと思ったのかもしれませんが、これまで自分たちを導いてくれたモーセが、四十日もいなくなってしまったことは、民にとって大きな試みでした。主が私たちに試みを許される理由のひとつは、自分の不完全さを知り、主なる神様だけに頼ることを覚えさせるためです。しかし、試みを受けたとき、神様以外のものに進んでしまう人もいます。このときのイスラエルの民がまさにそうでした。彼らは、これまで数多くの驚くべき神様の御業を見て来たにも関わらず、偶像の神々を造るようにとアロンに要求したのです。すべてご存じである神様は、何も知らないモーセに、民たちが早くも主の道からそれて墮落し、偶像を造らせ、拜もうとしていることを伝えます。モーセは事情がよくつかめず、にわかには信じられなかったかもしれませんが、しかし、主が「今は、わたしを引き止めるな。わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする」(出エジプト記 32 章 10 節)と言われるのを聞いて、これはただならぬことだと悟ります。モーセがすぐにとった行動は、民をかばうために神様の怒りをなだめることでした。モーセは 3 つの事実をもって、神様を思いとどませようとします。一つ目は、なんだかんだ言っても、神様ご自身がここまで、大いなる御力と御手をもってエジプトからここまで導き出された民ではないかということ。二つ目に、エジプト人に、あの神は彼らを山で殺すためにエジプトから導き出したと言われかねないということ。そして三つ目は、子孫を天の星のように増やし、約束の地を与えると約束されたことです。このモーセの捨て身のとりなしにより、主は民を滅ぼすのを思いとどまられます。ただ、神様は初めから民を滅ぼすつもりはなかったようです。モーセが民に対して愛と憐みの心を持っているかを試されたのです。人類のあけぼの上 P375 に次のように書かれています。

「神は彼の忠実さと彼があやまちに陥り、恩を忘れた人々を愛するかどうかを試みられた。そして、モーセは、その試練耐えたのである。」人類のあけぼの上 P375

神様の怒りは正当なものでした。だから、その神様の怒りをなだめるというのは、大変勇気のいるものだったことでしょう。しかし、人類のあけぼの上 P373 に、「モーセは、「わたしをとめるな」という神の言葉を、哀願を禁じるのではなくて、それを奨励するものと

解した」と書かれています。神様の中にモーセは愛と憐みを見出したのです。同じ愛と憐みを自分にも主は求めておられるのだとわかったのです。しかし、実際に民のしたい放題の姿を見たとき、そのあまりの酷さに、とても簡単に神様に憐れんでくださいなどとは言えないのだとわかりました。だから、モーセは主に、「今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば——。しかし、もしかなわなければ、どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください」(出エジプト記 32 章 32 節)と言ったのでした。これと同じことを私たちにしてくださったのがイエス様です。モーセの名が消し去られることはありませんでしたが、父なる神様は私たち罪人の命を救うために、御子イエス様の命を取られたのでした。

【火・迫害する者を愛する】

自分を嫌う人を愛すると言うのは簡単なことではありません。心身に傷を負うと、心深くに残り、癒されるまで長い時間を要するのです。場合によってはトラウマになり、一生引きずってしまうこともあります。しかし、それでもイエス様はこう言われるのです。

マタイ 5 章 44 節「しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」

敵や迫害するものは、当然、こちらを愛していないわけですから、一方的に愛することになります。敵を愛するとは、許すということでもあります。なぜ、敵を許し愛さなければならぬのでしょうか。それは父なる神様がそのような人をも愛されているからです。

マタイ 5 章 45 節「あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」

注目すべきは、そのような敵を愛することによって、私たちは完全なものとなることです。

マタイ 5 章 48 節「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

この聖句から、完全とは父なる神様のように人を愛することであることがわかります。問題は、ではどうすれば敵を愛し、許すことができるのかということですが、これは努力してできることではありません。表面的にはあるいはその場をつくらって、大人の付き合いができるかもしれませんが、それは本当の愛ではありません。敵を愛するというのは奇跡なのです。神様が私たちの心を変えてくださることによって、はじめて敵を許し、愛せるようになるのです。気が付いてみれば許せていた。そんな感じかもしれません。私たちに問われているのは、そのような本当の愛を生きるものになりたいかどうかです。求めよ、そうすれば与えられるという約束は、このような正しいものを求めるときに、必ず実現することでしょう。

【水・封じられた発言】

イエス様は「わたしは柔和で謙遜な者だから・・・私に学びなさい」(マタイ 11:29)と言われました。私たちに求められている柔和さと謙遜さとは、イエス様のような柔和さや謙遜さです。しかし、それは私たちの想像を超えたものです。ペテロは召使に対して、次のように教えています。

ペトロの手紙一 2 章 18～21 節「召し使いたち、心からおそれ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい。不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです。罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。」

本来平等なはずの人間が、他の人に仕えてなければならないことがあります。そのような人たちに対して、「無慈悲な主人であっても心からおそれ敬って主人に従いなさい。不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです」と教えているのです。なぜ、これが神様の御心となるのでしょうか。それはイエス様もそのように歩まれたからだと言います。王の王である方が、さげすまされても、僕のように歩まれたのです。私たちも、自分の意に反して、人に仕えなければならないことがあったとき、この聖句を思い出し、主の御心なのだと思えば信じて耐えていくものでありたいものです。

【木・私たちの岩そして隠れ家】

詩編 62 編 2、3 節「わたしの魂は沈黙して、ただ神に向かう。神にわたしの救いはある。神こそ、わたしの岩、わたしの救い、砦の塔。わたしは決して動揺しない。」

敵のために祈らなければならないことや、召使のごとくに仕えなければならないこともあるなど、主が私たちに要求されることを実践するのは簡単なことではありません。敵のために祈れば、友に変わってくれるのであれば良いですが、更に私たちを追い込むこともあります。主が求めておられるのは、敵が友になることではなく、敵のままであったとしても柔和な心をもってなおも祝福を祈っていくことです。どうしたら、このような生き方ができるのでしょうか。常に敵に囲まれていたダビデは、「わたしの魂は沈黙して、ただ神に向かう。神にわたしの救いはある。神こそ、わたしの岩、わたしの救い、砦の塔。わたしは決して動揺しない」と言いました。私たちの目は敵に向けられるのではなく、主に向けられなければなりません。イエス様というフィルターを通して、周囲を見渡していくとき、景色は変わってきます。主の岩の上に固く立ち、動揺することのない信仰が与えられるように祈っていきたいものです。